雪霊続記

泉鏡花

一

機会がおのずから来ました。

今度の旅は、一体はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、そこで、一事を済したあとを、姫路行の汽車で東京へ帰ろうとしたのでありました。――この列車は、米原で一体分身して、分れて東西へ馳ります。

それが大雪のために進行が続けられなくなって、晩方武生駅（越前）へ留ったのです。強いて一町場ぐらいは前進出来ない事はない。が、そうすると、深山の小駅ですから、旅舎にも食料にも、乗客に対する設備

が不足で、危険であるからとの事でありました。元来——帰途にこの線をたよって東海道へ大廻りをしようとしたのは、……実は途中で決心が出来たら、武生へ降りて許されない事ながら、そこから虎杖の里に、もとの蔦屋（旅館）のお米さんを訪ねようという……見る見る積る雪の中に、淡雪の消えるような、あだなのぞみがあったのです。でその望を煽るために、もう福井あたりから酒さえ飲んだのでありますが、酔いもしなければ、心も定らないのでありました。

ただ一夜、徒らに、思出の武生の町に宿っても構わない。が、宿りつつ、そこに虎杖の里を彼方に視て、

心も足も運べない時の儚（はかな）さにはなお堪えられまい、と思いなやんでいますうちに——

汽車は着きました。

目をつむって、耳を圧（おさ）えて、発車を待つのが、三分、五分、十分十五分——やや三十分過ぎて、やがて、駅員にその不通の通達を聞いた時は！

雪がそのままの待女郎（まちじょろう）になって、手を取って導くようで、まんじ巴（ともえ）の中空（なかぞら）を渡る橋は、さながらに玉の桟橋（かけはし）かと思われました。

人間は増長します。——積雪のために汽車が留って難儀をすると言えば——旅籠（はたご）は取らないで、すぐにお

米さんの許（もと）へ、そうだ、行って行（ゆ）けなそうな事はない、が、しかし……と、そんな事を思って、早や壁も天井も雪の空のようになった停車場（ステエション）に、しばらく考えていましたが、余り不躾（ぶしつけ）だと己（おのれ）を制して、やっぱり一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客の中（うち）で、停車場（ステエション）を離れましたのは、多分私が一番あとだったろうと思います。

　大雪です。

　　「雪やこんこ、
　　　霰（あられ）やこんこ。」

　大雪です——が、停車場（ステエション）前の茶店では、まだ小児た

ちの、そんな声が聞えていました。その時分は、山の根笹を吹くように、風もさらさらと鳴りましたっけ。町へ入るまでに日もとっぷりと暮果てますと、

「爺（じい）さイのウ婆（ばば）さイのウ、
綿雪小雪が降るわいのウ、
雨炉も小窓もしめさっし。」

と寂しい侘（わび）しい唄の声――雪も、小児（こども）が爺婆（じいばあ）に化けました。――風も次第に、ごうごうと樹ながら山を揺（ゆす）りました。

店屋さえもう戸が閉（しま）る。……旅籠屋も門を閉（とざ）しました。

家名（いえな）も何も構わず、いまそこも閉めようとする一軒の旅籠屋へ駈込（かけこ）みましたのですから、場所は町の目貫（めぬき）の向（むき）へは遠いけれど、鎮守の方へは近かったのです。

座敷は二階で、だだっ広い、人気の少ないさみしい家で、夕餉（ゆうげ）もさびしゅうございました。

若狭鰈（わかさがれい）——大すきですが、それが附木（つけぎ）のように凍っています——白子魚乾（しらすぼし）、切干大根（きりぼしだいこん）の酢、椀はまた白子魚乾に、とろろ昆布の吸もの——しかし、何となく可懐（なつか）しくって涙ぐまるるようでした、なぜですか。……

酒も呼んだが酔いません。むかしの事を考えると、病苦を救われたお米さんに対して、生意気らしく恥か

しい。両手を炬燵（こたつ）にさして、俯向（うつむ）いていました、濡れるように涙が出ます。

さっという吹雪であります。さっと吹くあとを、ごうーと鳴る。……次第に家ごと揺（ゆす）るほどになりましたのに、何という寂寞（さびしさ）だか、あの、ひっそりと障子の鳴る音。カタカタカタ、白い魔が忍んで来る、雪入道が透見（すきみ）する。カタカタカタカタ、さーッ、さーッ、ごうごうと吹くなかに――見る見るうちに障子の桟がパッパッと白くなります、雨戸の隙（すき）へ鳥の嘴（くちばし）程吹込む雪です。

「大雪の降る夜など、町の路が絶えますと、三日も四日も私一人――」

三年以前に逢った時、……お米さんが言ったのです。

…………………

「路の絶える。大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、この吹雪に……

「……ただ一人。」――

私は決然として、身ごしらえをしたのであります。

「電報を――」

と言って、旅宿を出ました。

実はなくなりました父が、その危篤の時、東京から

帰りますのに、（タダイマココマデキマシタ）とこの町から発信した……偶（ふ）とそれを口実に——時間は遅くはありませんが、目口もあかない、この吹雪に、何と言って外へ出ようと、放火（つけび）か強盗、人殺（ひとごろし）に疑われはしまいかと危（あやぶ）むまでに、さんざん思い惑（まど）ったあとです。

ころ柿のような髪を結った霜げた女中が、雑炊（ぞうすい）でもするのでしょう——土間で大釜（おおがま）の下を焚（た）いていました。番頭は帳場に青い顔をしていました。が、無論、自分たちがその使（つかい）に出ようとは怪我（けが）にも言わないのでありました。

二

「どうなるのだろう……とにかくこれは尋常事じゃない。」

私は幾度となく雪に転び、風に倒れながら思ったのであります。

「天狗の為す業だ、——魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いているのだと思いました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——そうは

言っても、小高い場所に雪が積ったのではありません、粉雪(こゆき)の吹溜(ふきだま)りがこんもりと積ったのを、哄(どっ)と吹く風が根こそぎにその吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの数(すう)ではない。波の重(かさな)るような、幾つも幾つも、颯(さっ)と吹いて、むらむらと位置を乱して、八方へ高くなります。

私はもう、それまでに、幾度(いくたび)もその渦にくるくると巻かれて、大(おおき)な水の輪に、孑孑虫(ぼうふらむし)が引(ひっ)くりかえるような形で、取っては投げられ、摑(つか)んでは倒され、捲(ま)き上げては倒されました。

私は——白昼、北海の荒波の上で起る処のこの吹雪

の渦を見た事があります。——一度は、たとえば、敦賀(つるが)湾でありました——絵にかいた雨竜(あまりょう)のぐるぐると輪を巻いて、一条(ひとすじ)、ゆったりと尾を下に垂れたような形のものが、降りしきり、吹煽(ふきあお)って空中に薄黒い列を造ります。

　見ているうちに、その一つが、ぱっと消えるかと思うと、たちまち、ぽっと、続いて同じ形が顕(あらわ)れます。消えるのではない、幽(かすか)に見える若狭(わかさ)の岬へ矢のごとく白くなって飛ぶのです。一つ一つがみなそうでした。

——吹雪の渦は湧(わ)いては飛び、湧いては飛びます。私の耳を打ち、鼻を捩(ね)じつつ、いま、その渦が乗っ

ては飛び、掠めては走るんです。

大波に漂う小舟は、宙天に揺上らるる時は、ただ波ばかり、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉落さる る時は、海底の巌の根なる藻の、紅き碧きをさえ見ると言います。

風の一息死ぬ、真空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、その屋根を圧して果しなく十重二十重に高く聳ち、遥に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……お米さんの素足さえ、きっぱりと見えました。が、脈を打って吹雪が来ると、

呼吸は咽(むせ)んで、目は盲(めしい)のようになるのでありました。最早(もはや)、最後かと思う時に、鎮守の社(やしろ)が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰の尖(とが)ったような真白(まっしろ)な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある処――天狗――魔の手など意識しましたのは、その樹のせいかも知れません。ただしこれに目標(めじるし)が出来たためか、背に根が生えたようになって、倒れている雪の丘の飛移るような思いはなくなりました。

まことは、両側にまだ家のありました頃は、――中に旅籠も交っています――一面識はなくっても、同じ

汽車に乗った人たちが、疎(まばら)にも、それぞれの二階に籠(こも)っているらしい、それこそ親友が附添っているように、気丈夫に頼母(たのも)しかったのであります。もっともそれを心あてに、頼む。――助けて――助けて――と幾度(いくたび)か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈火(ともしび)の影の漏れて答うる光もありませんでした。聞える筈(はず)もありますまい。

いまは、ただお米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……むしろ目を瞑(ねむ)るばかりになりました。

時に不思議なものを見ました――底(そこひ)なき雪の大空

の、なおその上を、プスリと鑿（のみ）で穿（うが）ってその穴から落ちこぼれる……大きさはそうです……蠟燭（ろうそく）の灯の少し大（おおき）いほどな真蒼（まっさお）な光が、ちらちらと雪を染め、染めて、ちらちらと染めながら、ツツと輝いて、その古杉の梢（こずえ）に来て留りました。その青い火は、しかし私の魂がもう藻脱けて、虚空へ飛んで、倒（さかさま）に下の亡骸（なきがら）を覗（のぞ）いたのかも知れません。

が、その影が映（さ）すと、半ば埋（うも）れた私の身体（からだ）は、ぱっと紫陽花に包まれたように、青く、藍（あい）に、群青（ぐんじょう）になりました。

　この山の上なる峠の茶屋を思い出す——極暑、病気

のため、俥で越えて、故郷へ帰る道すがら、その茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれていました。――私の顔の色も同じだったろうと思う、手も青い。

何より、嫌な、可恐い雷が鳴ったのです。たださえ破れようとする心臓に、動悸は、破障子の煽るようで、震える手に飲む水の、水より前に無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

その時の苦しさ。――今も。

三

白い梢の青い火は、また中空（なかぞら）の渦を映し出す——とぐろを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で尾根に近かった、あの可恐（おそろし）い雲の峰にそっくりであります。

この上、雷。

大雷は雪国の、こんな時に起ります。

死力を籠（こ）めて、起上ろうとすると、その渦が、風で、ごうと巻いて、捲（ま）きながら乱るると見れば、計知（はかりし）られぬ高さから颯（さっ）と大滝を揺落（ゆりおと）すように、泡沫（あわ）とも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降埋（ふりうず）める。

「あっ。」

私はまた倒れました。

怪火(あやしび)に映る、その大滝の雪は、目の前なる、ズツンと重い、大(おおき)な山の頂から一雪崩(ひとなだ)れに落ちて来るようにも見えました。

引挫(ひっし)がれた。

苦痛の顔の、醜さを隠そうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套(がいとう)の袖を被(かぶ)ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますようで、且つ白羽二重の裏に薄萌黄(うすもえぎ)がすッと透(とお)るようでした。

ウオオオオ！

俄然(がぜん)として耳を噛(か)んだのは、凄(すご)く可恐(おそろし)い、且つ力ある犬の声でありました。

ウオオオオ！

虎の嘯(うそぶ)くとよりは、竜の吟ずるがごとき、凄烈(せいれつ)悲壮な声であります。

ウオオオオ！

三声を続けて鳴いたと思うと……雪をかついだ、太く逞(たくま)しい、しかし痩(や)せた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだように立ったのが、吹雪の滝を、上の峰から、一直線に飛下りたごとく思われます。たちまち私の傍(そば)を近々と横ぎって、左右に雪の白泡(しらあわ)を、ざっ

と蹴立てて、あたかも水雷艇の荒浪を切るがごとく猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、真白な一条の路が開けました。——雪の渦が十オばかりぐるぐると続いて行く。……

これを反対にすると、虎杖の方へ行くのであります。犬のその進む方は、まるで違った道でありました。が、私は夢中で、そのあとに続いたのであります。路は一面、渺々と白い野原になりました。が、大犬の勢は衰えません。——勿論、行くあとに行くあとに道が開けます。渦が続いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫って、あの青い火が、蜿々（うねうね）と蛍のように飛んで来ました。

真正面（まっしょうめん）に、凹字形（おうじけい）の大（おおき）な建ものが、真白（まっしろ）な大軍艦のように朦朧（もうろう）として顕（あらわ）れました。と見ると、怪し火は、何と、ツツツと尾を曳（ひ）きつつ、先へ斜（ななめ）に飛んで、その大屋根の高い棟なる避雷針の尖端（とったん）に、ぱっと留って、ちらちらと青く輝きます。

ウオオオオ

鉄づくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋（うず）まった真中（まんなか）を、犬は山を乗るように入ります。私は坂を越すように続きました。

ドンと鳴って、犬の頭突(ずつ)きに、扉が開(あ)いた。

余りの嬉しさに、雪に一度手を支(つか)えて、鎮守の方を遥拝(ようはい)しつつ、建ものの、戸を入りました。

学校――中学校です。

ト、犬は廊下を、どこへ行ったか分りません。

途端に……

ざっざっと、あの続いた渦が、一ツずつ数万の蛾(が)の群ったような、一人の人の形になって、縦隊一列に入って来ました。雪で束(つか)ねたようですが、いずれも演習行軍の装(よそおい)して、真先(まっさき)なのは刀(とう)を取って、ぴたりと胸にあてている。それが長靴を高く踏んでずかりと入る。

あとから、背嚢（はいのう）、荷銃（にないづつ）したのを、一隊十七人まで数えました。

うろつく者には、傍目（わきめ）も触（ふ）らず、粛然として廊下を長く打って、通って、広い講堂が、青白く映って開く、そこへ堂々と入ったのです。

「休め――」

……と声する。

私は雪籠（ゆきごも）りの許（ゆるし）を受けようとして、たどたどと近づきましたが、扉のしまった中の様子を、硝子窓越（がらすまどごし）に、ふと見て茫然（ぼうぜん）と立ちました。

真中（まんなか）の卓子（テエブル）を囲んで、入乱れつつ椅子に掛けて、背

嚢も解かず、銃を引つけたまま、大皿に装（よそ）った、握飯、赤飯、煮染（にしめ）をてんでんに取っています。

頭（かしら）を振り、足ぶみをするのなぞ見えますけれども、声は籠って聞えません。

――わあ――

と罵（ののし）るか、笑うか、一つ大声が響いたと思うと、あの長靴なのが、つかつかと進んで、半月形（がた）の講壇に上って、ツと身を一方に開くと、一人、真（まっ）すぐに進んで、正面の黒板へ白墨（チョオク）を手にして、何事をか記すのです、――勿論、武装のままでありました。

何にも、黒板へ顕れません。

続いて一人、また同じ事をしました。
が、何にも黒板へ顕れません。
十六人が十六人、同じようなことをした。最後に、肩と頭（かしら）と一団になったと思うと——その隊長と思うのが、衝（つつ）と面（おもて）を背けました時——苛（いら）つように、自棄（やけ）のように、てんでんに、一斉（いちどき）に白墨（チョオク）を投げました。雪が群って散るようです。
「気をつけ。」
つつと鷲（わし）が片翼を長く開いたように、壇をかけて列が整う。
「右向け、右——前へ！」

入口が背後にあるか、……吸わるるように消えました。

と思うと、忽然(こつねん)として、顕れて、むくと躍って、卓子(テエブル)の真中(まんなか)へ高く乗った。雪を払えば咽喉(のど)白くして、茶の斑(まだら)なる、畑(はた)将軍のさながら犬獅子(けんじし)……

ウオオオオ！

肩を聳(そばだ)て、前脚をスクと立てて、耳がその円天井(まるてんじょう)へ届くかとして、嚇(かっ)と大口を開けて、まがみは遠く黒板に呼吸(いき)を吐いた——

黒板は一面真白(まっしろ)な雪に変りました。

この猛犬は、——土地ではまだ、深山(みやま)にかくれて活(い)

きている事を信ぜられています――雪中行軍に擬して、中の河内（かわち）を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、某（それの）中学生が十五人、無慚（むざん）にも凍死をしたのでした。
――七年前（ぜん）――
　雪難之碑はその記念だそうであります。
――その時、かねて校庭に養われて、嚮導（きょうどう）に立った犬の、恥じて自ら殺したとも言い、しからずと言うのが――ここに顕れたのでありました。
　一行が遭難の日は、学校に例として、食饌（しょくせん）を備えるそうです。ちょうどその夜（よ）に当ったのです。が、同じ月、同じ夜（よ）のその命日は、月が晴れても、附近の町は、

宵から戸を閉じるそうです、真白(まっしろ)な十七人が縦横に町を通るからだと言います——後でこれを聞きました。

私は眠るように、学校の廊下に倒れていました。

翌早朝、小使部屋の炉(いろり)の焚火に救われて蘇生(よみがえ)ったのであります。が、いずれにも、しかも、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢った一人(にん)として、駅員、殊に駅長さんの御立会(おたちあい)になった事でありました。

大正十（一九二一）年四月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十一巻」岩波書店
　　１９４１（昭和16）年９月30日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００５年11月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。